

む とう すけ え も ん
武藤助右衛門



武藤助右衛門 (1859 ~ 1925)
 写真：シンポジウム「中部の電力のあゆみ」
 第8回講演報告資料集、2000

武藤助右衛門は1859(安政6)年2月、岐阜県武儀郡生櫛村(現美濃市)の西部市兵衛の次男(幼名虎吉)として生まれた。1879(明治12)年7月、20歳のときに武藤家の養子となり、1895年、十九代助右衛門を襲名した。武藤家はもともと刀鍛冶であったが、江戸時代からは鉱物商を代々営んでいた。助右衛門は、「家業鉱物商ノ外」鉱業の経営に乗り出し、1902年9月、郡上郡にある畑佐鉱山(銅、銀等を産出)を開発する奥濃鉱業を設立し、社長となった。鉱山に自家用発電所(100KW)を設けて、その電力を坑内の灯火や鉱石運搬用索道に使用し、これが契機となって後に電気事業に進むことになった。

■板取川電気の設立し、第一発電所、井ノ面発電所の建設へ
 当時すでに名古屋電灯は立花(現美濃市立花)に長良川発電所をつくり、電力事業を推進していたが、そこで生み出された電気は地元には殆ど還元されず、名古屋市内に送られていた。地方の発展における電力利用の重要性を認識した助右衛門は、板取川電気を創立して、安毛(現美濃市安毛)に第一発電所(113KW)をつくり、1910(明治43)年11月に運転を開始し、地元の町や村に電気の供給を開始した。長良川の水利権は名古屋電灯が独占していたことから、その支流である板取川の水を利用して、水力発電を行った点は特筆に値する。
 また、この電気を利用して、1911年に岐阜県内で最初の鉄道である美濃電気軌道(美濃町と岐阜市を結ぶ)が開通した。電力需要の拡大によって、第二発電所である井ノ面発電所(300KW)が安毛につくられた。これは長良川に面した山の岸壁に岩盤をくり抜いて、そのなかに水車・発電機を設置した。このような工法は、我が国でも初めての事例であり、土木技師であった永田喜之助の設計をもとに、スイス人ハトマンや京都大学の太藤高彦、青柳栄司両教授の指導を得て建設された。



井ノ面発電所の導水路 写真：筆者撮影

熱意を以て寝食を忘れて尽力

—中濃地域に電気を初めて導入した事業家—

■生い立ちから奥濃鉱業の設立へ

武藤助右衛門は1859(安政6)年2月、岐阜県武儀郡生櫛村(現美濃市)の西部市兵衛の次男(幼名虎吉)として生まれた。1879(明治12)年7月、20歳のときに武藤家の養子となり、1895年、十九代助右衛門を襲名した。武藤家はもともと刀鍛冶であったが、江戸時代からは鉱物商を代々営んでいた。助右衛門は、「家業鉱物商ノ外」鉱業の経営に乗り出し、1902年9月、郡上郡にある畑佐鉱山(銅、銀等を産出)を開発する奥濃鉱業を設立し、社長となった。鉱山に自家用発電所(100KW)を設けて、その電力を坑内の灯火や鉱石運搬用索道に使用し、これが契機となって後に電気事業に進むことになった。

■板取川電気の設立し、第一発電所、井ノ面発電所の建設へ

当時すでに名古屋電灯は立花(現美濃市立花)に長良川発電所をつくり、電力事業を推進していたが、そこで生み出された電気は地元には殆ど還元されず、名古屋市内に送られていた。地方の発展における電力利用の重要性を認識した助右衛門は、板取川電気を創立して、安毛(現美濃市安毛)に第一発電所(113KW)をつくり、1910(明治43)年11月に運転を開始し、地元の町や村に電気の供給を開始した。長良川の水利権は名古屋電灯が独占していたことから、その支流である板取川の水を利用して、水力発電を行った点は特筆に値する。



井ノ面発電所 (300kW) 写真：筆者撮影

■事業家としての武藤助右衛門

助右衛門は、奥濃鉱業、板取川電気以外にも数多くの事業を起こし、地域の発展に貢献した。1896(明治29)年には上有知銀行を創立し、その取締役となった。板取川電機の関連会社として、1916(大正5)年に中濃電気を合併した。可児川電気と犬山電灯(愛知県)も助右衛門は役員を兼任した。

美濃電化(後に美濃電化肥料と改称)も1918年6月に設立し、社長となった。この会社は、1919年に炭化カルシウム(カーバイド)の製造を開始し、板取川に白谷発電所(1500KW)を建設した。板取川電気は美濃電化から230KWを受電し、美濃電気軌道に供給した。

板取川電気は、1921年8月に名古屋電灯に合併されて、消滅した。晩年の助右衛門はその譲渡によって得た資金で美濃救護院を設立し、社会事業に尽くした。

(横山悦生)